

歌枕と芭蕉

——『おくのほそ道』『武隈の松』『末の松山』の検討から——

安田 徳子

芭蕉の奥の細道の旅が、「陸奥の歌枕を見む」ことを目的の一つとしていたことは、「翁陸奥の歌枕見む事をおもひ立侍りて、日比住みける芭蕉庵を破り捨」（杉風詠草前書¹）とあることなどから窺われる。

また、『奥の細道』の冒頭には、

春立る霞の空に、白川の関こえむと、そゞろがみの物につきて
こゝろをくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取もの手につか
ず。もゝ引の破をつゞり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆる
より、松嶋の月先心にかゝりて

とあり、この旅の動機は、まずは「白川の関」を越え、「松島の月」を見ることであった。

歌枕とは何か。今更言うまでもないが、片桐洋一氏は『歌枕うたことば辞典増補版』の概説冒頭で、

「歌枕をたずねて」といえば、歌によまれた名所をたずねてということであるように、歌枕という語は、今では、歌によまれた土地、ないしは歌によまれた地名の意に理解されている。

と、述べられている通りである。ただ、歌枕を「歌によまれた土地、ないしは歌によまれた地名」と理解するようになったのは、『俊頼髓脳』に「世に歌枕といひて所の名かきたる物あり」とある頃からである。その少し前、能因が記した『能因歌枕』は地名ではない歌語も多く挙げられ、ここでは歌枕は「歌をよむための基本的歌語のこと」（前掲書概説）を指している。「白川の関」も「松島」も歌に詠まれた地名、芭蕉の時代には著名な歌枕であった。芭蕉はこれを尋ねようとしていたことが裏付けられる。

歌枕を尋ねるとはどういうことか。歌枕は長い和歌の土壌の下で育ってきた認識である。それを芭蕉が如何に捉えていたのか、芭蕉

と歌枕についてはすでに多くの論考があるが、芭蕉の歌枕認識については、未だ曖昧な点が残されている。本稿ではこの点から検証を加えてみたいと思う。

(一)

『古事談』(二―三)に、藤原行成と殿上で諍いをし、行成の冠を取って投げ捨てた藤原実方に対して、一条天皇が「歌枕みてまゐれ」と言って陸奥守に任せられた話が語られている。同じ話が『十訓抄』(八―一)にも載っていて、よく知られた話だが、ここでは歌枕を「歌い詠まれた地名」と捉え、その地を尋ねるといふ行動を求めている。しかし、『古事談』『十訓抄』ともに鎌倉時代の成立、片桐氏も前掲書で述べられている如く「一条天皇の言葉ではなく、両集の時代の記述であると考え」るべきであろう。しかし、実方は、藤原師尹の孫、定(貞)時の男、叔父小一条大将済時の養子となり、正四位下左中将。歌人で舞の名手、円融・花山両院のサロンで風流貴公子として持て囃された人物。一条天皇の勅勘の結果ではなからうが、長徳元年(九九五)陸奥守となって下り、長徳四年(一一月)三日任地で客死した。

『実方集』^①には、実方が陸奥で詠んだ歌も見出されるが、実方が陸奥守に任せられた頃、小大君と交わした連歌がある。

みちのくになり給ふころ、殿上にて出むとし給ふに、まつの遅かりければ、みちのぶの中将さねかたとも

まつまつほどぞ久しかりける

小大君

みちのくにほど遠ければたけくまの(二七九)

ちなみに、「みちのぶ(道信)」は正暦五年(九九四)に亡くなっているので、ここは注記の「さねかた(実方)」が正しい。実方と小大君は親密な間柄であったらしい。実方が陸奥守に任せられた直後に交わした贈答、「武隈の松」を共通の認識としている。ところで、『小大君集』^②に、

春宮にて、小弓射させ給ふに、夜になりて、灯ともしにやりたるが、実方の中将、みちのくになりてのことなり

まつほどぞ久しかりけるゆく末のまた遠ければ武隈の松(二二)とある。これは前歌の異伝かとも思われるが、陸奥と言えば「武隈の松」という認識が前提にあったことが窺われる。「武隈の松」は現在宮城県岩沼市にある竹駒神社付近にある一本の松のことだといふが、それは後世の付会である。しかし、実方の時代、陸奥国の「武隈の松」は都の歌人達には知られていたのである。『小大君集』には、「ためなか(為頼の誤りか)」が陸奥守となって下向する時に贈った詠(四九)にも「たけくまの松」が詠まれている。さらに、

『拾遺集』においても、藤原為頼が陸奥守として下向する時の詠（別、三三八）、親しい者が陸奥へ下向する時に詠じた大中臣能宣の詠（雑上、四六〇）にも「たけくまの松」が詠まれている。

「武隈の松」を詠じた歌は『後撰集』雑三の、

陸奥国の守にまかり下れりけるに、たけくまの松の枯れて
侍りけるを見て、小松を植ゑ継がせ侍りて、任はててのち

又同じ国にまかりなりて、かの先の任に植ゑし松を見侍り

て
藤原もとよしの朝臣

栽ゑし時契りやしけんたけくまの松をふたたびあひ見つるかな

（一二四一）

が初見という。武隈は陸奥の国府があった地であり、陸奥守としてこの地に下向した藤原元善が、そこで長寿のはずの松が枯れているのを見て、小松を植ゑ継いだ。元善は後年再下向して、成長した松を見て感動して詠じたのがこの歌であって、元善の実体験をそのまま詠じたものである。元善は、片桐氏によれば、南家真作流、従四位下で丹後守・備前守を勤めた諸藤の男と考えられる。経歴は明らかでないが、一〇世紀前半から中葉頃の人物であろう。ところで、

『清正集』に、

あるところにて、陸奥国の守のせられける日

かりそめの別れと思へどたけくまの松にほどへむことぞわびし

き（一）

の詠が見える。清正は堤中納言兼輔の二男。朱雀・村上朝で活躍した歌人。右詠は清正が陸奥守となった知人に贈った詠である。また、『九条右大臣（師輔）集』にも、

藤原の兼時陸奥国になりて下るに、はなむけ給ふとて

たけくまの松はいく世か経にけると年を数へて帰りあはなん

（八五）

とある。藤原師輔が藤原兼時が陸奥守になった時贈った歌である。

清正も師輔も一〇世紀前半から中葉に活躍した歌人で、おそらく、元善と同時代人と思われる。陸奥の国府に生える「武隈の松」はこの頃すでに都人に知られていたらしい。元善もよく知られた「武隈の松」が枯れているの見て、植ゑ継いだということだったかもしれない。

ところで、『相如集』に、

物言ひて仲絶えたる人のもとに行きたるに、ふすべ顔なれば
いまさらになにたけくまの猛からん心のうちにまつは生ひつつ

（八）

宮の御ことにて騒がれしころ、人をとらへて、せちにある

まじきよしを言へば、許して、又の日

陸奥の奥を思ひは許ししを我がたけくまと思ふらんやぞ（一八）

の二首が見える。いずれも相如が女に贈った詠で、陸奥の地とは関わりがない状況でも「武隈」が詠み込まれ、「猛し」「待つ」「奥」といった表現を引き出している。相如は藤原敦忠の孫、伊尹・道信・能宣なども親交があり、長徳元年（九九五）没しているのので、実方などと同時代の歌人。また、『長能集』には、

松一たてる丘を見て詠める

たけくまにいづく違へり草むらのとよのうかみにまつたてる丘

(八)

とある。松が生うていれば「武隈」のはずという。この頃には「松の生う陸奥国府武隈」は宮廷貴族の共通の知識だったのである。

ところで、『実方集』には陸奥に下向した折の詠には、「みとしがは」(二二七)・「はことりの関」(二二八)・「はばかりの関」(二七六)を詠じた歌の他は、あまり地名を詠じた歌は見えない。「歌枕みてまるれ」と言われたかはともかく、実方が歌枕を廻った形跡はない。しかし、実方の陸奥下向に随行した源重之(同地で客死)は「武隈の松」を訪れた。『重之集』には、

たけくまの松、一本枯れにけり

たけくまの松も一本枯れにけり風にかたぶく声のさびしさ

(一九九)

年を経て誰をまつとかたけくまのときはにのみは出てたてらん

(二一〇〇)

たけくまの浜辺にたてる松だにも我がごと一人ありきとやみる

(二一九)

の詠を残している。これによれば、重之が武隈で松を見たとき、一本はまた枯れてしまっていたのである。しかし、重之も「武隈の松」は見ているが、家集からは他の「歌枕」を廻った形跡は窺えない。

さらにもう少し下ると、能因は陸奥へ二度旅し、武隈に至っている。

たけくまの松、はじめの旅は枯れながらも杭などありき、

この度はそれもなし

たけくまの松はこのたび跡もなし千年を経てや我はきつらん

『能因集』一〇七

能因が初度訪れた時も松は枯れていた。二度目に訪れた時には跡形もなくになっていた。『能因集』には「想像奥州十首」と題された歌があり、その中の一首「たけくまの松」にも、

跡なくていくよ経ぬらんいにしへはかはり植ゑけんたけくまの

松(一四一)

とある。「かはり植ゑけん」は、『後撰集』の元善詠を念頭に置いたものである。現実には松は失せていても、能因はこれを詠んだのである。また、『嘉言集』に、

たけくまの松、絵にかきたるが、老い枯れたる木にかきて、
旅人の過ぐるままに

けふ見れば老い果てにけりたけくまのかはりの松を植ゑやかへ
まし(一六七)

とある。「武隈の松」は絵にも老い枯れた如く描かれ、「かはりの松」
を「植ゑ替へ」と詠まれている。

ところで、『為仲集』には陸奥守として下向した折の詠が三首あ
るが、その中の一首に、

たけくまにて、国の人出で来りて曰く、古へは松侍りけり、
失せて久しう成りけれども、国の司いらせ給ふ時、かなら
ず松の枝を求めて、かくたて侍るなり、先々物の心をしら
せ給へる人は、ここに歌をなむ詠ませ給ふ、と言へば

たけくまの跡を尋ねて引き植うる松や千年の初めなるらむ

(一二三九)

とある。「武隈の松」は枯れて失せているのだが、歌人がその跡を
尋ねることも通例化していたことを窺わせる。

また、『後拾遺集』には、

則光朝臣の供に陸奥国に下りてたけくまの松を詠み侍りけ
る
橘季通

たけくまの松はふたきをみやこ人いかかと問はばみきとこたへ

む(雑四・一〇四一)

とあり、さらに、

橘季通陸奥国に下りてたけくまの松を歌に詠み侍けるに、
二木の松を人問はばみきとこたへんなど詠みて侍けるをつ
てに聞きてよみ侍ける
僧深覚

たけくまの松は二木をみきといふはよく詠めるにはあらぬなる
べし(雑六・一一九九)

とある。橘季通は父陸奥守則光の供をして陸奥に下った。「武隈の
松」は「二木」と詠んだ。前述の『重之集』によれば、「武隈の松」
は一本でなかったようだが、この季通詠からすると、「二木の松」
則ち根は一本で二つに別れた松であつたらしい。

「武隈の松」は国府の地にあり、陸奥守などとして下向した歌人
たちは現実の場に出逢い、これを詠じた。これが都に伝わり、次第
に意味やイメージが附加されていった。歌枕「武隈の松」は現実の場
を背景に持ちつつ発達した歌枕であつた。『五代集歌枕』には「た
けくま 陸奥」として、すでに検討した元善・為頼・季通・能因・
深覚の五首が載る。しかし、この頃には「武隈の松」は跡形もなかつ
たらしい。藤原清輔の『奥義抄』には、元善詠の注として、

武隈の松はいづれのよゝりありけるものともしらぬ人は、うゑ
しときとよまれたれば、おぼつかなくもや思ふとて書きいで、

侍るなり。此松は昔よりあるにはあらず。宮内卿藤原元善といひける人の任に、たちの前にはじめてうゑたる松なり。みちのくにの館はたけくまといふところにある。この人ふたゝびかの国になりて後のたびよめる歌なり。たけくまのはなはの松ともよめり。重之歌に云、(歌略、前述『重之集』三一九、第二句「はなはにたてる」、五句「ありとやはきく」) たけくまのはなはとて山のさしいでたる所のあるなりとぞ近くみたる人はまうし。この松野火にやけにければ、源満仲が任に又うう。其後又うせたるを橋道貞が任にうう。其後孝義きりて橋につくり、のちたえにけり。うたてかりける人なり。なくともよむべし。

と記されている。「武隈の松」は元善が国府の館前に植えたことに始まり、満仲、道貞と松が失せる度に歴代の陸奥守が植え継いできたが、平孝義が陸奥守として赴任した時、松を切つて橋の材として以降、無くなつてしまつたといふのである。この逸話はその後、『和歌色葉』『和歌童蒙抄』『色葉和難集』『袖中抄』と伝わり、『歌枕名寄』の能因詠左注(前述一〇七)にも記され、松が失せてしまつたことは歌人たちには周知のことだったが、歌枕は「なくともよむ」ものだったのである。陸奥に旅した西行も『山家集』に、

たけくまの松も昔になりたりけれども、跡をだにとて見に
まかりてよみける

枯れにける松なき跡のたけくまはみきといひてもかひなかるべし(一一二八)

の一首を残している。「跡だけでも」と尋ねる。歌枕の場を訪れることは、古歌によって意味付けられた場に身を置くこと、あるべきものがない風景も歌人の目に映り、心動かされる風景なのである。

一方で、この頃から題詠歌が発達する。そこでも、

たけくまの二木の松と祝ふかな影を並べて千年経よとて(『清輔集』三〇六・祝両人)

たけくまの松に心をならべてぞみきとは人に語るべらなる(『拾玉集』九五四・松)

など、「武隈の松」は陸奥国で植え継がれた二木の松としてしばしば詠まれた。しかし、これらはもはや現実の場、現実の物ではなく、「武隈の松」という歌枕によって意味づけられた概念である。実景は念頭にない。

(二)

もう一つ「歌枕」を見る。「末の松山」も陸奥の歌枕として著名なものである。これを詠じた歌としては、『古今集』東歌に収められた、

君をおきてあだし心を我がもたば末の松山浪もこえなむ(一〇〇)

がもつとも古詠であろう。現在の宮城県多賀城市の末松山宝国寺の裏山付近のことと伝えられ、二本の巨松がそびえているという。^⑧後述する如く、芭蕉もここを尋ねているが、実際のところ、場所は定かではない。右詠は古い東国の民謡で、決して浪が越えてくることのない「末の松山」を「波が越す」と歌うことで、あり得ないことを強調して、変わらない恋心を訴えた。『古今集』にはもう一首「末の松山」を詠じた歌があるが、

寛平御時後の宮の歌合の歌

藤原の興風

浦ちかく降りくる雪は白浪の末の松山越すかとぞ見る

(冬・三二六)

この興風の歌も、恋歌ではないが、すでに「波が越す」という前述の東歌の世界が前提となっている。『後撰集』恋一の、

男のもとにつかはしける

土左

我が袖は名にたつ末の松山か空より浪の越えぬ日はなし

(六八三)

は、東歌の「波が越す」というのが恋の裏切りを示す意であることをそのまま用いている。『後拾遺集』恋四の、

心かはりて侍りける女に人にかはりて

清原元輔

契りきなかたみに袖をしばりつつ末の松山波越さじとは

は、『百人一首』などにも収められ、「末の松山」を詠じた歌としては最も著名な詠であるが、これも東歌の世界を前提としていることは言うまでもない。「末の松山」は非常に早い時期から、『古今集』所収の東歌によるイメージが広く浸透した。

また、前項で見た「武隈」と違って、「末の松山」はほとんど現実の場を捉えた詠作がない。僅かに、『重之集』に、

末の松山に、子曰に、この人の母車にて出でたるに、守し

げみ、介つねみなど言ひあひたりと言へば、たるなりなど

言へば

末の松山にぞきつる我ならで波のみだると聞かぬたくて

(六八三)

とあり、また、『能因集』に、

末の松山にて

白浪の越すかとのみぞ聞こえける末の松山まつ風の声(一〇八)

とあるくらいである。重之も能因も前項に述べた如く、陸奥に下った。その折に「末の松山」を訪れた時の詠作である。その時訪れた場所が、芭蕉と同じ所であったかは明らかではない。ともあれ、波音の聞こえる現実の風景を捉えているのかもしれないが、「波が越す」という前述の『古今集』東歌が前提となっている。「末の松山」

は東歌の影響が強烈で、現実の場は早くに昇華されてしまい、詠作にはほとんど意識されなかったのである。題詠が発達した頃には、

波越さばうらみむとこそ契りしかいかなりゆく末の松山

〔続後撰集〕恋五「恋」・俊成・九四七

霞たつ末の松山ほのぼのと波にはなるる横雲の空

〔新古今集〕春上「春曙」・家隆・三七

など、名歌も多い。これらに詠まれた「末の松山」は虚構の場であるが、古歌によって意味付けられた場であり、作者はそこに身を置いて詠作するのである。

片桐氏によれば、平安時代後期の古典和歌完成期の歌は、「情」を昇華させた「景」の世界を作りあげたという^①。その中で、地名も「情」の世界を持った歌ことばと認知された、それが歌枕だったのである。したがって、「歌枕」は、歌人にとって歌を詠ずる時の「情」の発露であって、本歌・本説によって形成される詠作の場、たとえ現実の場がそこにあっても、現実そのままの場ではない。歌枕を尋ねるといふことは、特別に意味付けられた場に身を置くことであって、そこで歌人は、眼前の風景をそのまま見るのではなく、歌心に映る風景を見るのである。

さて、芭蕉は『奥の細道』の旅で、「武隈の松」も「末の松山」も尋ねている。

まず、前者の部分は、

岩沼宿

武隈の松にこそ目覚る心地ハすれ。根は土際より二木にわか
れて、むかしの姿うしなはずとしらる。先能因法師おもひ出ツ。
往昔むつのかみにて下りし人、此木を伐りて名取川の橋杭にせ
られたる事などあればにや、「松ハ此たび跡もなし」とハよみ
たり。代々あるハ伐、あるハ植継などせしと聞に、今将千歳
のかたちとゝのひて、めでたき松の気しきになん侍し。

たけくまの松みせ申せ遅桜

と挙白と云ものゝ餞別したりけれバ、

桜より松は二木を三月越シ

とある。「奥の細道」の旅に当たって、芭蕉に随行した曾良は「神名帳抄録」と「歌枕覚書」を作成し、旅の便に供した。「歌枕覚書」は『類字名所和歌集』と『楢山拾葉』によって記され、行程の途上にある「歌枕」とそれを詠み込んだ歌が記されている。ここについては、「武隈」として能因と深覚の詠が記されている。芭蕉は伊達藩領に入って、岩沼宿に至る。『曾良随行日記』によると、「岩沼入口ノ左ノ方ニ竹駒明神ト云有リ。ソノ別当ノ寺ノ後ニ武隈ノ松有。」

竹がきヲシテ有。ソノ辺、侍やしき也。古市源七殿住所也。」とある。そこは陸奥の国府のあった地、「武隈の松」が生えていた。芭蕉は、昔に変わらぬ二木の松の姿にまず感動を覚えた。「歌枕覚書」記載の深覚詠が念頭にあったからであろうか。芭蕉は『奥の細道』を記すに当たって、「歌枕覚書」以外にも複数の名所和歌集も見たのではないかとの指摘もある。その一方で、名所和歌集に頼っていたのではなく、芭蕉が多くの先行文学から養った文学的感覚によって「歌枕」を廻った、とする主張も示されている。「二木の松」であることは周知の範疇であり、「先能因法師おもひ出ヅ」とあることから見ても、特定の典拠歌を求めなくてもよからう。

芭蕉が「武隈の松」に出逢って、最初に思い至ったのは能因の詠であった。しかし、陸奥守が此木を伐って名取川の橋杭にしたという話は、前項で述べた如く、『奥義抄』以来、伝えられてきた逸話であるが、「名取川の橋杭」と明記するものはない。「武隈の松」から「名取川」に近い。芭蕉は自らの探訪の中で「名取川」と認めたものかも知れない。「松ハ此たび跡もなし」と能因が詠じたように、「武隈の松」は橋杭にされて以降は長く失われたままだったらしいが、何時の頃かまた植えられて、芭蕉は昔のままの二木の松を眼前にできた。芭蕉は変わらぬ姿に感動した。その感動を芭蕉は、弟子の挙白の餞別句への返句に表わす。挙白は、江戸出立の時、遅咲き

の桜に託して「武隈の松」を見ることを勧めた。三月末に桜の江戸を出て、足掛け三箇月、ようやく武隈に至り、昔に変わらぬ「二木の松」を見たと言んで、挙白の餞別への謝意という形で表す。「松」に「待つ」、「三月」には「見つ」が掛けられ、「二木」に対応させて、和歌的表現を踏まえてはいるが、「植え継がれた松」ではなく、「桜」と「松」を対応させて詠み、歌枕「武隈の松」が作り出す世界から芭蕉個人の世界へと向かっている。

一方、「末の松山」については、

末の松山は寺を造りて、末松山と云。松のあひく皆墓原にて、はねをかハし枝をつらぬる契りの末も、終にはかくのごときと、かなしさも増りて、塩がまの浦に入逢のかねを聞。

とある。芭蕉は当然の如く、「末の松山」の跡とされる末松山宝国寺の裏山を尋ねる。今は墓地となっているその地を見て、比翼連理を誓った男女も末は墓の下と無常に心を動かされる。比翼連理の男女を思うのは、勿論『古今集』の東歌と『百人一首』の興風詠に拠るのだが、芭蕉の思いは「末の松山」という歌枕が作り出す和歌的世界には向かっていない。変わり果てた「末の松山」の今の有り様に突きつけられた人の儂さに心動かされる。夕刻、塩竈の浦に至っても入相の鐘を聞く思いは同じであった。

ところで、『奥の細道』中で、掲出した二箇所間に位置する部分で、芭蕉は「壺碑」という歌枕を尋ねている。この歌枕は、平安末期になってようやく都に知られたもので、それほど多く詠まれた歌枕ではない。しかも、芭蕉が尋ねたのはそれではない。歌枕「壺碑」は青森県上北郡天間林村にあった坂上田村麻呂が蝦夷を征討した時のものであって、芭蕉が尋ねた多賀城の碑ではないのである。しかし、この部分で芭蕉は唯一「歌枕」の語を用い、「歌枕」に対する思いを記している。

むかしよりよみ置る歌枕、多くかたり伝ふといへども、山崩川流て、道あらたまり、石は埋て土にかくれ、木ハ老て若木にかはれば、時移り代変じて、其跡たしかならぬ事のみを、爰至りてうたがひなき千歳の記念、今眼前に古人の心を閱ス。行脚の一徳、存命の悦、羈旅の勞をわすれて、泪も落るばかり也。

例えば、西行や清輔が、

陸奥の奥ゆかしくぞ思ほゆる壺のいしぶみ外の浜風

(山家集・一〇二一)

石文や津軽のをちにありときくえぞ世の中を思ひ離れぬ

(清輔集・三八九)

と詠んでいるように、「壺の碑」は陸奥の最果てにあって誰も見た

こともなかった。「ふみ」に「文」を、「えぞ」に「蝦夷」を掛けて詠むことが多く、碑そのものが具体的に詠まれることはなかった。ところが、芭蕉はこの「壺碑」を見て、「うたがひなき千歳の記念、今眼前に古人の心を閱ス」という。千年前のままの「碑」によって古人の心そのものに出逢えたと感動的に記す。しかし、それは古歌によって意味付けられた歌枕「壺碑」とは違うのである。歌枕は勿論、歌に詠まれた名所であるが、芭蕉は必ずしも和歌世界に拘ってはいなかった。歌枕は芭蕉にとって、和歌世界とは限らず、古に思いを馳せる縁だったのである。

歌人達にとって歌枕は、本歌・本説によって意味付けられた空間、現実であっても虚構であっても、眼前に変わらぬ姿があっても、変わってしまったとしても、そこに身を置けば歌心が発露する空間であった。しかし、芭蕉は歌枕を尋ねた時、まずは昔に変わらぬ姿を求めていた。「武隈の松」や「壺碑」の如く、変わらぬ姿を眼前にした時、芭蕉は古人との不変の結びつきを感じた。しかし現実には、尋ねた歌枕は昔とは大きく変化していることが多かった。跡形もなくなっていることもあった。その現実を目の当たりにして、生々流転、人の儂さを感じた。まさに歌枕は芭蕉に不易流行を認知させる空間であった。¹⁶⁾芭蕉は、歌枕を尋ねながら、和歌世界から離れて個人的な思いに向かった。『奥の細道』には、現実を目の当たりにした自

身の率直な思いを記した。ここに、芭蕉の独特の歌枕観があったと言えよう。

注

(1) 久富哲雄『おくのほそ道』と名所和歌集(『俳文芸』一九七四・一二)、『日本文学研究史料叢書芭蕉Ⅱ』再録)に引用がある。

(注2) 引用は日本古典文学全集本を用いた。

(注3) 『奥の細道菅菰抄』、飯野哲三『おくのほそ道歌枕考』(『おくのほそ道の基礎的研究』一九三九 国文社)以下、歌枕と『奥の細道』に関する論考は多い。

(注4) 『実方集』は新編国歌大観第三卷所収のものにより、適宜漢字を当てた。以下、歌は断らない限り新編国歌大観によった。

(注5) 私家集大成(明治書院)により、適宜漢字を当てた。『小大君集』Ⅰ(一〇八)・Ⅱ(一三八)にも同じ歌が見えるが、「宮にてゆみいさせ給ふに、くらうなるに、人めすにおそければ」(Ⅰ)などとあって、人物名は示されていない。

(注6) 片桐洋一『歌枕歌ことば辞典増補版』(笠間書院 一九九九・六)、久保田淳・馬場あき子監修『歌ことば歌枕大辞典』

(角川書店 一九九九・五)など。

(注7) 日本古典文学大系『後撰和歌集』「作者部類」参照。

(注8) 『日本歌学大系』第一巻による。

(注9) 金沢規雄「歌枕意識の変貌とその定着過程―歌枕「末の松山」の運命―」(『文学』五四―一二 一九八六・一二)

(注10) 注6参照。

(注11) 片桐洋一『歌枕歌ことば辞典増補版』解説。

(注12) 天理善本叢書『芭蕉紀行文集』所収の『曾良随行日記』に拠り、この部分の名称はその解説に拠った。

(注13) 中西啓『おくのほそ道』の歌枕―曾良の随行準備資料をめぐって―(『寒雷』一九六〇・二)、三浦隆『おくのほそ道の基礎資料―曾良「歌枕覚書」について―』(『語文(日本大学)』五六 一九八三・二)

(注14) 注1参照。

(注15) 大村明子『おくのほそ道』の歌枕―名所和歌集の位置付け―(『近世文芸研究と評論』四二 一九九二・六)

(注16) 『おくのほそ道』の歌枕探訪と不易流行については、乾裕幸『おくのほそ道』・歌枕の想像力(『国文学』三四―六一 一九八九・五)などの論がある。